



A Descriptive Study of Inverted Usages of Direct Quotation in English

著者	今野 昌俊
号	18
学位授与機関	Tohoku University
学位授与番号	情博第552号
URL	http://hdl.handle.net/10097/59927

氏名（本籍地）	こんの まさとし 今野 昌俊
学 位 の 種 類	博士（情報科学）
学 位 記 番 号	情博第 552 号
学位授与年月日	平成 25 年 3 月 27 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
研 究 科、専 攻	東北大学大学院情報科学研究科（博士課程）人間社会情報科学専攻
学 位 論 文 題 目	A Descriptive Study of Inverted Usages of Direct Quotation in English (英語の直接話法における倒置用法の記述的研究)
論 文 審 査 委 員	(主査) 東北大学 准教授 菊地 朗 東北大学 教授 小川 芳樹 東北大学 教授 岩崎 祥一 東北大学 准教授 長野 明子 下関市立大学 准教授 西田 光一

論文内容の要旨

第 1 章 Introduction

本章では、本研究をしていく上での目的と問題点を提示することから始めている。英語の直接引用構文(**direct quote structure**)には様々な語順があることがこれまで認められているが、本論文では伝達部の主語と動詞が倒置を起こす事例を主に取り扱うことが述べられている。また、言語研究をする上での手法となる言語理論にはそれぞれが得意とする領域が存在するのであって、本論文では、特定の言語理論をすべての言語現象に当てはめようとするのではなく、その都度、適切かつ妥当な理論を使用すればよいという立場であることが述べられている。

本論文では、先行研究の調査、大規模コーパスによる量的分析、英語母語話者による内省といった様々な角度からのアプローチが試みられるが、本章では、その議論を円滑にするために使用するコーパスの説明や主に利用する理論（関連性理論）の概観を行っている。そのようにすることで、議論が不必要に中断されることなく進められるようにしている。

第 2 章 Inversion in English

本章では、先行研究を概観する形で、英語の倒置一般の機能について述べている。英語の倒置一般の機能については、これまで異なる研究者が様々な機能を指摘しているが、**Green (1980)**の指摘する 4 つの機能、すなわち、効果的機能(**practical function**)、結束機能(**connective function**)、導入機能(**introductory function**)、強調機能(**emphatic function**)が倒置の主要な、かつ、基本的な機能である。これら以外にも派生的な機能が多々指摘されているが、本論文の目的は英語の直接引用構文における伝達部の主語と動詞の倒置にあり、英語の倒置一般の機能の網羅的記述を目的とはしていないため、上記の基本的機能の言及に焦点が当てられている。

第 3 章 Direct Quote Structures in English

本章では英語の直接引用構文の先行研究と本論文の考えが論じられている。本論文は、専門用語は明確に定義されるべきだという立場を採り、特に、直接引用構文の倒置現象は、引用句倒置(**quotation inversion**)、引用節倒置(**quotative inversion**)、報道式倒置(**journalistic style inversion**)の 3 種類があることを指摘している。また、直接引用構文の先行研究を文法的・意味的・談話構造的の 3 つの角度に分類し、概観している。更に、直接引用構文の伝達部(**reporting clause**)の動詞が句動詞 **go on** の場合は、その主語との倒置は起こらないという先行研究に対し、大規模コーパスによる調査と英語母語話者へのインフォーマント調査という 2 つの角度から調査をしている。その結果、大規模コーパスからは生起例が多く観察されるものの、母語話者の容認度調査では容認度が低いという事実から、両者の間には乖離があることが示されている。

第 4 章 Journalistic Style Inversion in English

本章では、報道式倒置について考察をしている。まず、文法書、文体・使用域、語法、要因の

4つの角度の先行研究が概観され、問題点あるいは本論文での調査項目へと導いている。1点目はアメリカ英語を調査対象とした先行研究が存在するのに対して、イギリス英語ではどうか調査され、同様に報道文に特有の表現であることが指摘される。2点目は主語が人称代名詞のときは倒置が起こるのかが調査され、生起自体はするが、その頻度は多くはないことが指摘される。3点目はアメリカのTIME誌との関連性がTIME誌コーパスの援用によって量的に保証され、また、伝達部の動詞が句動詞のときでも倒置が起こることが示されている。その際、後置主語の属性は文末焦点(end-focus)・文末重点(end-weight)の原則に適っていることが指摘される。4点目は写真の下キャプションで当該倒置現象が生起する事例が指摘され、これは写真が先行文脈の代わりとなることで倒置の条件が満たされていることが指摘される。5点目は、当該倒置はKreyer (2006)の提案する追加機能(add-on function)の一例であることが示唆され、テキスト上あまり重要ではない情報を述べるときに使用されるのではないかという可能性を示唆し、締め括られている。

第5章 Another Usage of Journalistic Style Inversion

本章では、報道式倒置に談話標識(discourse marker)が先行する構造について論じられている。他者の発話を引用する際、引用符をつけることがあるが、報告者が要約したり、自身の言葉に置き換えて引用する場合、引用符は付与されない。また、英語では誰が言ったのかを表す伝達部が文中に挿入的に生起することがある。この2つの事実が重なると、引用される発話や思考が誰に帰属するのかが問題になることを、特に文頭に引用符なしの談話標識が生起している事例を挙げて示している。結果として、談話標識は引用することができない要素であるが、これらの談話標識は編集作業における読者への補足説明として使用されていると考えることができる。更に、本章では、関連性理論の枠組みの手続き的意味という概念を用いて、読者がどのようにそれらの談話標識を、伝達部の主語を担う人物の思考・発話ではなく、報告者の思考であると判断・解釈しているのかを分析している。

第6章 Conclusion

本章は、本論文のまとめとなっている。本論文の主張の一つは、直接引用構文における倒置現象について言及する際、引用句倒置、引用節倒置、報道式倒置の3種類を明確に分けるべきだということである。また、本論文の特徴の一つは、報道式倒置について重点を置き、記述してある点だといえる。報道式倒置が第5章で扱ったような、やや複雑、かつ派生的な語順になった事例は、直接引用構文以外の言語現象ともかかわってくるように思われるが、本論文が直接引用構文に焦点を当てているという点を考慮すると、この問題は今後の課題となると思われる。

論文審査結果の要旨

英語の直接話法構文は、引用句とその発話者である主語および発話動詞が多様な語順で生起し、その語順の説明には、複雑に絡み合った統語的・意味的・情報構造的要因の分析が求められる。本論文は、特に倒置を見せる直接話法構文についてコーパス資料を駆使し、語用論的観点からその情報構造上の特徴を割り出し、語順および生起する動詞類の説明を試みており、全編6章からなる。

第1章は序論である。

第2章では、先行研究を概観する形で英語の倒置一般の機能について述べられている。著者は効果的機能、結束機能、導入機能、強調機能の4つが倒置の基本的機能であると述べている。

第3章では、先行研究について著者の評価と直接引用構文についての著者の研究方法が述べられている。著者は、直接引用構文の倒置現象を、引用句倒置、引用節倒置、報道式倒置に3分類した上で、特に先行研究では伝達部の動詞が句動詞 *go on* の場合はその主語との倒置は起こらないとされていることを取り上げ、その主張を大規模コーパスによる調査と母語話者へのインフォーマント調査を通じて検討した。調査の結果、大規模コーパスからは生起例が多く観察されるが、インフォーマント調査では容認度が低いという事実を見出し、コーパス調査とインフォーマント調査の間には乖離があることを実証した。これは新しい知見である。

第4章では、報道式倒置を取り上げ、先行研究の問題点を指摘したうえで、次の5点の主張を行っている。1)本倒置構文は報道文に特有の表現であること。2)主語が人称代名詞である場合の倒置は確かに生起自体は認められるが、頻度はわずかであること。3)コーパスを利用し本倒置構文が米国 *TIME* 誌の文体と関連性があること、および伝達部の動詞が句動詞でも倒置が可能であること。4)写真のキャプションで当該倒置が生起する事例を検討し、これは写真が先行文脈の代わりとなることで倒置の条件が満たされている構文であること。5)当該倒置は追加機能の一例であり、談話上重要度が低い情報を述べるときに使用されること。これら5点の指摘は今後の同構文の分析の基礎となる有用な洞察である。

第5章では、報道式倒置に談話標識が先行する表現形式を論じ、特に引用符が用いられずに引用が行われた場合に、この談話標識が発話者と報告者のどちらに帰属する情報であるかを検討している。著者は、様々な事例の検討を通じて、これらの談話標識は（報告者による）編集作業における読者への補足説明として使用されると指摘した。そして、読者がそれらの談話標識を伝達部の主語を担う人物の思考・発話ではなく、報告者の思考であると解釈する仕組みを、関連性理論における手続き的意味の概念を用いて分析している。指摘・分析ともに独創的であると言える。

第6章は結論である。

以上要するに本論文は、倒置を起こす英語直接話法構文に関し、文献資料の調査およびインフォーマント調査に加えて大規模コーパスによって得られた資料に基づき、談話分析の手法と関連性理論の枠組みの適用を通じて、その情報構造および談話構造上の特徴を解明したもので、言語テキストの情報解析ならびに語用論分析一般の発展に寄与するところが少なくない。

よって、本論文は、博士（情報科学）の学位論文として合格と認める。